
終末思想 A side

秋助

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

終末思想 A side

【Nコード】

N5115N

【作者名】

秋助

【あらすじ】

週末の二人、終末の世界

(前書き)

自分には超短編の方が似合うんだなー…

A sideは男性視点。 B sideは女性視点になっています

死んじゃえ。とか、普通に考える。例えば、自己中心的な人間とか。例えば、血液型に未来を託すロマンチストなど。知らない人に挨拶されるだけで、冬の訪れを感じるだけで、とても優しい気持ちになれるのに。二秒後には普通に考える。死んじゃえ。とか。世界なんか壊れちゃえ。とか。幼稚で当然のように毎日考える。

そんな事を思ったからこんな世界になったのか。或いは、これは彼女の夢なのかも。これは彼女の望む世界。全てに置いて平等で不公平で。全てに置いて綺麗で醜くて。何が楽しくて、何が悲しくて何を求めて、何が嫌で死にたくて、終末思想。稚拙な彼女。

そんな彼女でも好きになったんだ。それでも僕ら恋人になったんだ。色恋しそう。歪んだ思想。正しい彼女に合わせるよ。終末思想の集合体に合わせるよ。

*

*

二月の寒さで目が覚めた。

デジタル時計の表示する数字が全て0になっていて、アラームが鳴らなかったのだ。携帯で時間を確認すると十三時を過ぎていた。あとで時計の電池を取り替えようと思いつながら、僕は日課のようにテレビの電源を入れると、そこには砂嵐が映る。故障でもしたかなと思いつける。調べても全く原因は解らなかつた。

今日は彼女と待ち合わせをして、『週末になったら』と前々から話してたクレイプ屋さんに行く事になっている。待ち合わせ時間に少しでも遅れたら彼女はとて不機嫌になるので、三十分前だけどスグに服を着替えて家を出た。

*

*

外に出ると既に日が沈みかけていた。

時刻はまだ十四時を回っていないはずなのに、街中が鮮明なオレ
ンジに染まる。しばらく商店街を歩いていると更におかしい事に気
付いた。動物や昆虫は当たり前のようにありふれているけど、人の
姿がない。いつも賑わっている商店街というわけではないが、こん
なにも閑散としている光景を見るのは初めてだった。いや、閑散の
言葉は相応しくない。誰一人いないのだ。恐らく。何処にも。静か
過ぎて、心が騒々しい。

活気のない大型電気店。マネキンだけの洋服店。辺りを見回して
いる内に状況の理解も出来ぬまま、時間と平常心だけが過ぎていく。
『現段階で考えられ得るエゴって、みんな死ぬ事だと思うの』
彼女が言っていた。終末思想。

もしかしたらこれは彼女の夢なのかも。それが彼女の望む世界。
兎にも角にも、生きている人間を捜す事が優先だと思い、大型電
気店へと足を向ける。

*

*

拡声器と大量の単三電池をパッケージから取り出してポケットに
突っ込んだ。加えて双眼鏡を適当に見繕う。両手いっぱい抱え込
みながら店の外へ出て、一番見晴らしの良い建物を捜していると、
数百メートル先にデパートが見えたので其処を目指す。

デパートの屋上に立って、拡声器に単三電池を二本セットしてス
イッチを押す。呼吸。ゆっくりと、深呼吸。そして、

「

叫んだ。

誰かいませんか。とか。おーい。とか。誰もいないかもしれ
ない現状を逆手に取って、彼女の名前とか。好きだとか。叫んだ。

大きい声を出したせいか、拡声器から発せられた音が割れる。何
度も、何度も、似たような言葉を放つ。何時間も、何日も叫んだよ

うな気がする。なのに一向に雨が止む気配はなく、夕暮れは夕暮れのままだった。いつしか喉が潰れて、汚い地面に仰向けで倒れた。……ん。……ん。視界がぼやけてきた。呼吸も苦しくなって……。もう、いいや。この呼び掛けを聞いて誰かが此処に来ると思うから。例えば、彼女とか。例えば、彼女以外とか。その誰かが来るまで、もうしばらく倒れていよう。

*

*

『君は……その、私の事、可哀相と思つた？』

互いに大学一年生だった僕達は小さい病院の大広間で対面した。汚い椅子に座って、背中越しに。僕と彼女は大学で会うまで全く知らない同士だったけど、昨日の入学式での出来事は鮮明に、衝動的に覚えている。世界にはこんなにも綺麗な人が本当に存在するのかもしれない、すぐに僕の憧れにもなった。

『別に……。理解してるつもりだし』

『……そう』

言つて、彼女は病院の出口へと向かつて行つた。と、思う。背中越しだったから。僕は存分に時間を空けた後、振り返り出口の方を見たけどやっぱり、当たり前のように彼女はいなくなっていた。

彼女の事が好きな訳じゃない。ただ、知りたいだけなんだ。彼女の世界。彼女の思想。僕は、ずっとそういつた『差異』や『異常』に憧れていたから。

『君さ』『え？』

急に後ろから肩を叩かれた。声のする方へと体を回転させると、そこには二十代前半の髪の毛の長い、綺麗な女性が立っていた。

『何ですか？』

『君はあの娘の、その……何なの？』

『……昨日入学式で知り合つたばかりの存在です』

『……そう』

『あの、あなた誰なんですか？』

急に関係性を聞いてくる失礼なあなたは、とまではさすがに言葉を続けられなかった。

『あの娘の主治医だよ』『はい？』

思わず大きな声が出てしまう。失礼なのは僕の方だった。でも、この女性が先生だとは思えない。だって、

『あー、よく驚かれるの。色んな人から『そんなに綺麗ならモデルにでもなればいいのに』って言われるし。大丈夫、慣れてるから』

確かにモデルになれそうなくらい綺麗な人だけど、自分でそれを言うからには、性格はお世辞にも良いとは言えないかもしれない。

『でもそれってさ、主治医にはオッサンしかいないと思ってるからじゃないの？ 失礼とは思わない？ 君を含めて』

『そんなイメージがありますからね』皮肉を込めて言ってやった。

『……君は、あの娘の事、正直どう思った？』

『そりゃ……まあ』不幸だな、とは思いましたけど。言葉が詰まる。

『個人の勝手な価値観で不幸だと思わない方がいいよ。君がどれほどあの娘を不幸だと思おうと、あの娘の世界では絶対的な幸福が形成されている。例えばそれがどんなに』『あの』………何？』

もういい。もういいから。

『彼女は……その、どうしてこんな事になったんですか？』

『それは……』

世の中には聞かない方がいい事もある。そう言って、女性は去って行った。守秘義務と言わなかった辺りが、彼女の、深い闇に届きそうに嫌になった。

*

*

……なんて、どうでもいい昔話を思い出した。

声が出ない。身体に力が入らない。……まだ夕暮れ時だった。何時間も、何日も叫んだのに。そのような気になっていたのに。

「ねえ」

ふと、あまりにも聞き慣れた声が後ろから発せられる。確かめずとも確信するその声に僕は安堵しながら振り向くと、そこには案の定彼女がいた。至極、当たり前のように。

「もういいんじゃないの」

「み、ず。……………うえ」

違う。そんな事をよりも大事な事を言わないといけないハズなのに。叫んだせいで困憊した頭じゃよく考えられなくなっていた。疲弊し切った身体で彼女を見上げ、枯れた声で彼女に水をせがむ。

「はい」と、多分どこから盗んできたであろう水をぞんざいに僕へと投げ付ける。僕はキャップを外し勢い良く水を喉に流し込む。

「…………大丈夫だった？」…………何が？」「何がって…………」

彼女は言ってる意味が解らないと不思議そうな顔をする。

「散歩してたの」「散歩？　こんなときに？」「こんなときだから終末の景色を見ておきたいの。そう言わんばかりの口調だった。

「これ…………君がやったの？」

「私にこんな事が出来ると思う？」

「思うよ。この世界は君の終末思想と同じだから」

「…………同じ？」

悪意が滲んだ彼女の声が、つまらなさそうな彼女の顔が、次第に引き彎っていくのがスローモーションで解かった。

「あのさ、あのさあ、違うでしょ？　言ったよね？　私、言ったよね？」

「あの時、私は何て言ったんだっけ？　ねえ、何だっけ？」

「…………ごめん」

何が、ごめんだ。いつも僕らはそうやって都合が悪くなると逃げ出しているだけじゃないか。責められて、迫られて、互いのテリトリーに踏み込まないギリギリで付き合っているだけじゃないか。「

……………ッ！」その時、強く冷たい風が吹いて、何やら異臭がした。腐敗したような、焦げたような、決して好まない臭い。

「行ってみる？」

「……うん」

その臭いを辿り、歩く指針とする。僅かな差異でも縊らないと、微かな変化でも求めないと、終わりの世界では気が狂ってしまう。ゆっくりと、臭いの原因へと辿り着く。

其処には、無残に大型トラックがパチンコ屋に突っ込んでいた。店の中は台のコード類が剥き出しになり、大量のパチンコ玉が散乱して、トラックからは火が燃え盛っていた。

そして、炎上しているトラックのもつと下。車輪の近く。人間だった。

白いコートに赤いチェックのマフラー。それだけでも分かっているのに。もっとそれに近寄って確かめる。僕の彼女だった人の形を。彼女の両手は不自然に胸の前で組まれていて、身体の右横には花束が置かれていた。じゃあ、じゃあ僕に隣にいるこの人は……、

「覚えてる？ 忘れてるよね」

「お前、誰だ？」

「忘れちゃいけない事は、いつだって忘れてる事なのに」

そう言っつて、彼女だと思っていた人間は悲しく俯いて、人間だと思っていた彼女の冷たい頬に、そつと自分の頬を寄せた。

一瞬。ほんの一瞬、その光景がとても綺麗に見えてしまった。

僕の彼女も誰かの為に涙を流せればいいのに。

「クレープ、食べたかったね」

その人は視線を死体から別の方向へ向ける。

そこには彼女と行くはずだったクレープ屋があった。

そう言えば今日、本当は彼女とクレープを食べに行く予定になっていたのに。彼女が死んでしまった。残念だと、少しだけ思う。

「まだ思い出せないの？」

「何が？」

「あなたは此処で死んでない」

当たり前だよ。此処で死んだのなら、この場所に死体があるはずだ。それがないから。

それは、つまり、

「僕は死んでない？」

「ええ」

訂正。

「此処では死んでいない？」

ゆっくり、彼女は頷いた。

じゃあ。じゃあ、

「僕は何処で死んだんだ？」

事故に遭った彼女を置いて、僕は何処に逃げたんだ？

「随分あっさり自分が死んだって事を信じるのね」

「今は、だよ。理解したつもりにならないと気が狂うから」

だって、まだ何も解決していない。この世界は何なのか。彼女は誰なのか。僕の死体は何処にあるのか。………え？ 待つてよ。

ちよつと待つて。もし仮に僕が死んだとして、その死体があったとして、そしたら僕は、僕は何だ？ 僕は、………誰だ？

「ある仮説を立てたの」

「仮説？」

「仮説。この世界が何なのか。あなたの死体は何処にあるのか。私は一体誰なのか」

付いてきて。そう言って彼女は応えを返す間もなく歩き始めた。

僕も仕方なく歩き始める。流されるままに、惰性のままに。

*

*

これから向かうであろう場所には予測が付いていた。正確には付き始めた。マネキンだけの洋服店。活気のない大型電気店。寂れた商店街を抜けて、少しずつ彼女の歩く速度が早くなる。数メートル先の突き当たりを右に曲がれば、見えてくるだろう。

彼女が立ち止まる。

僕も立ち止まる。

僕の家の前だった。

「……………あ」

死体があった。

「なん、……………で？」

此処にあるの？ 彼女が知ってるの？ やっぱり、この世界は、

彼女の……………、

「私が死んだのはクレープ屋の前だった」

「……………うん」

「だからクレープ屋の前に死体があった」

……………。

「あなたは私を置いて、家まで逃げたんだよ」

……………。…………。「あ」そうだ。思い出した。死んだんだ、僕達。

僕は彼女と一緒にクレープ屋まで行って、そして、曲がり角を曲がろうとした時にトラックが勢いよく彼女の元へぶつかった。その時僕は、僕は？ 怖くなって、逃げたんだ。彼女の見られない哀れな姿に、怯えたんだ。勢いよく逃げていたら、家の近くで車に、轢かれた。

「別にいいよ、そういう人だと思ってたから」

彼女が目を細めて僕を見る。見てはいるけど、意識は僕の方になんて微塵もなくて、軽蔑し切っている目だという事が解かった。

だって、その目は僕が彼女を見る時と同じ目だったから。

また、また、罪悪感に駆られてこの場から逃げ出したくなる。

彼女のいない、遠くの遠く。世界の果てまで。世界の終末まで。

「……………ッ！」

息が苦しくなった。

動悸が激しくなって、その場で倒れこむ。

ぐるぐるぐるぐる。

あのさ、

あのさあ、

蔑んだ目で見んの止めてくんない？

僕も醜いけど、君も大概に醜いよ。

ずつとずつとずつと。僕は歪んだ君に合わせてきたんだ。間違った事も絶対的に正しいと思ひ込む君に。たまには、壊れさせる。狂わせる。正常だけじゃ生き辛いんだよ。

これが、僕の二面性だった。或いは、二面以上性。多面異常性。ゆっくり立ち上がって、彼女の首を呪うように絞めつ「この世界の種明かし。聞きたい？」け……るの、を「……うん」止めた。

首から両手を離して、僕は「ごめん」と言った。

どくん。とくん。どくん。とくん。脈打った。

僕は、もう一度「ごめん」と言った。

「きつと此処は死後の世界。そして、天国でも地獄でもない世界」

「じゃあ……何処なの？」

自分を落ち着かせる為に、彼女の仮定を聞く。

「名前を付けるなら……『生まれ変わりの世界』」

「『生まれ変わりの世界』？」

「そう。人が死んで、また違う『何か』に生まれ変わる。この世界で生まれ変わりたい『何か』を望み、生まれ変わる段階の世界」

「望んだらそれになれるって言うの？」

「だから、仮定なんだって。それも虚言レベルのね」

虚言レベル。

僕が死んで、彼女が死んで、状況を理解出来なくて錯乱している様子もなく、『生まれ変わりの世界』。そんな事を考えられるなんて。さすが終末思想の持ち主だ。

「あなたはまだこの世界から抜け出したいと思ってるでしょ？」

「思ってるよ。こんな世界にいたら君が不幸になる」

「……あなたはきつと、生まれ変わったら獺になると思う」

その声色と鋭い眼光は、思うじゃなくて、絶対に、の顔だった。

「どうして？」

「獺は悪い夢を見せる。私はこの世界においてとても幸せ。なのにあなたは元の世界に引き戻して、私を不幸にしようとするじゃない。」

外から見て不幸でも、中は幸福かもしれない。外から見て幸福でも、中は不幸かもしれない。勝手なイメージで縛らないで」

と。……………は？

そうだよ。僕は彼女の事を不幸だと思ってるよ。不幸だと思っ
ていながらも大学の入学式でいきなり告白してきて学内の全方位に悪
意を撒き散らして病院に通っていて死んじゃえとか世界なんか壊れ
ちゃえとか幼稚で当然のように毎日考えてただけだからこそ僕は彼
女に幸福になつて貰いたいから彼女の為に生きてきたのに、

なのに、

彼女は、

『私を不幸にしようとするじゃない』？

言っている意味が解からなかった。

僕が、彼女を、不幸にしようとしている？

普通の思想なら。普通の女の子なら。そんなズレた事は考えない
よ。でも彼女は異常な思想だから。異常な女の子だから。そんな狂
った事を考えるんだね。だから、

想いにすらなれない感情は、

言葉にさえなれるはずがなかった。

それでも、僕はむりやりにでも口を開いた。

「君は……普通な女の子に生まれ変わればいいと思うよ」

「……私も、そう思う」

僕の時と同じく。思うじゃなくて、絶対に、の顔だった。

あー、そう。分かったよ。

行けばいいんだろ？

何処でも、何処までも。

一人でさ。独りでさ。

「まだ何処かに人がいるかも知れない。僕は捜しに行くよ。此処が
『生まれ変わり』の世界なんて信じない。僕達が死んだなんて信じ
ない必ず元の世界に戻る手掛かりを見つけるよ。君はどうする？」

「……………行かない」

「そう。進展があったら知らせるよ」

「……………」

「そろそろ行くから」

「……………」

「じゃあね」

「……………」

最後まで彼女は口を開かないまま、僕は背を向けて歩き出した。別に、いいけどさ。

だから、僕は行くけど、

終末を愛せたら君に会いに行くよ。

その代わり元の世界に戻って、

週末になったら僕に会いに来てよ。

「……………あなたはずっと、間違えたまま生きていくんだね」

「え？」

振り返ると夕陽が眩しかった。

君の姿が見えなかった。真っ黒だった。

(後書き)

本当の結末は B sideにて
最後までお読みいただきありがとうございます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5115n/>

終末思想 A side

2010年10月9日05時19分発行